

平成30年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成30年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

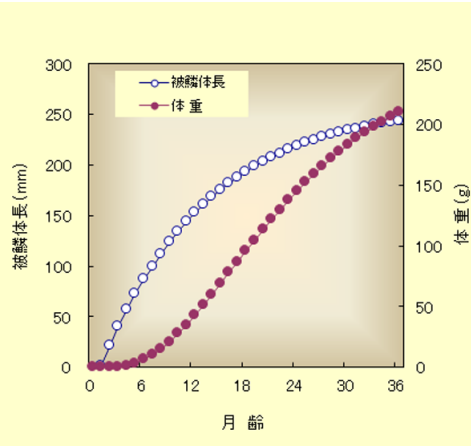
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 3年程度
成熟開始年齢： 1歳（100%）
産卵期・産卵場： 九州周辺水域では周年、日本海北部では春～夏
食性： カイアシ類、十脚類、端脚類
捕食者： 大型魚類、ほ乳類、海鳥類、頭足類

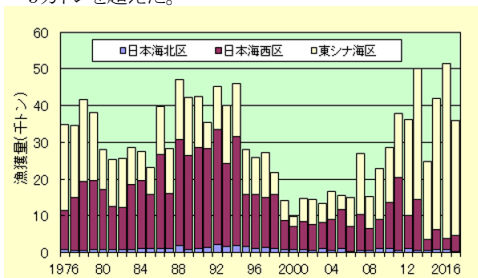


漁業の特徴

主な漁業は東シナ海区(福岡県～鹿児島県)では中小型まき網や棒受網であり、日本海西区(福井県～山口県)では大中型まき網、中型まき網、定置網である。日本海北区(石川県、富山県)では定置網などで混獲される程度である。また、対馬暖流域では、沿岸での釣や刺網による漁獲はほとんどない。韓国及び中国でもウルメイワシを漁獲しているが近年の漁獲量は不明である。

漁獲の動向

漁獲量は1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2017年は3.6万トンとなった。海区別では東シナ海区と日本海西区が漁獲のほとんどを占めている。東シナ海区では2001年から漁獲量が増加に転じ、2017年も3万トンを超えた。

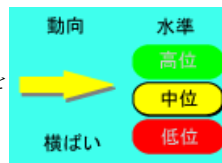


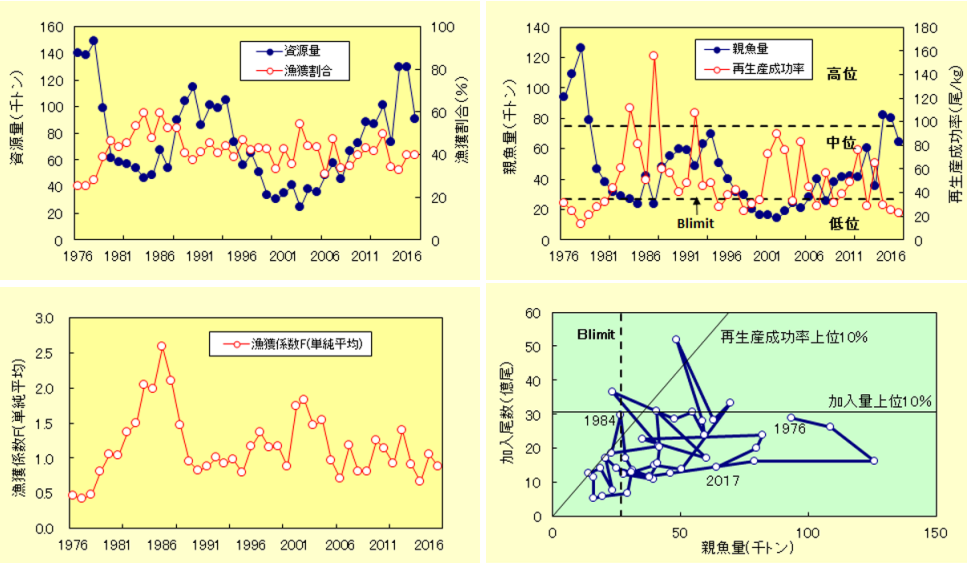
資源評価法

1976～2017年の月別漁獲量と体長測定資料から推定した年齢別漁獲尾数を用いたコホート解析により資源量を推定した。ただし、韓国、中国の漁獲データが得られていないため、日本の漁獲データに基づき資源評価を行った。

資源状態

資源量と親魚量は、2003年以降増加傾向にある。2017年の資源量は9万トン、親魚量は6.4万トンと推定された。親魚量と加入尾数との間には正の相関が認められたが、親魚量が多くなると加入尾数は頭打ちになる傾向が認められた。2017年のRPSは22.6尾/kgと低い値であった。Blimitは加入尾数の上位10%を示す直線と再生産成功率の上位10%を示す直線の交点に近い1984年の親魚量(2.7万トン)とした。資源水準は、高位と中位の境界を親魚量の最低値～最大値の3等分に近い7.5万トン、中位と低位の境界をBlimitとし、2017年の親魚量6.4万トンから資源水準は中位、動向は近年5年間(2013～2017年)の資源量の推移から横ばいと判断した。2017年はそれぞれ1、2歳魚の体重や資源尾数の減少がみられたため、親魚量が減少し、中位水準になったと判断した。





管理方策

2017年の親魚量はBlimitを上回っているが、直近年のRPSが過去3番目に低い値となっており、今後の加入量の推移に注意が必要である。そこで、親魚量の維持・増加を図ることを管理目標として、2019年のABCを算出した。Fmed (0.90)やFcurrent (0.87)で漁獲した場合、親魚量の維持・増加が期待された。将来的な漁獲量は両者で大きな違いはみられなかったが、Fcurrentは変動が比較的大きく将来予測が難しかったため、親魚量を維持するFmedを管理基準とした。本系群は、漁獲物の大半が0～1歳魚であり1歳で成熟する。親魚量を一定以上に保つため、加入が少ないと判断された場合は0歳魚を獲り控えるなどの方策が効果的と考えられる。

管理基準	Target/Limit	2019年ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの 増減%)
Fmed	Target	29	33	0.72 (-17%)
	Limit	33	38	0.90 (+3%)

- 本系群のABC算定には規則1-1)-(1)を用いた
- Limitは管理基準の下で許容される最大のF値(漁獲係数)による漁獲量、Targetは資源変動やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の増大が期待されるF値による漁獲量
- $F_{target} = \alpha F_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- F値は各年齢の平均値
- 漁獲割合は2019年の漁獲量/資源量
- 2018年以降の加入量は、不確実性の高い直近年を除く近年5年間(2012～2016年)の再生産成功率の中央値を使用して予測した
- 現状のFは2014～2016年の平均のF

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- Blimitは1984年の親魚量2.7万トン
- 2017年の資源量は9万トン、親魚量は6.4万トンで、Blimitを上回っている

管理方策のまとめ

- 親魚量の維持・増加を図ることを管理目標として、2019年ABCを算出した
- 親魚量を一定以上に保つため、加入が少ないと判断された場合には0歳魚を獲り控えるなどの方策が効果的

執筆者: 鈴木 圭・安田十也・黒田啓行・高橋素光

資源評価は毎年更新されます。